

# 「評価の不透明性」と自由間接話法

——『自負と偏見』におけるオースティンの語りの技法——

武 藤 哲 郎

## はじめに

ジェーン・オースティン (Jane Austen) の『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) を読むと、いくつか気付く点が出てくる。まず形から見てみると、語りの技法が物語の前半と後半とで大きく変わっている。具体的には、エリザベス (Elizabeth) がダーシー (Darcy) から求愛される場面を境に、前半では直接話法が多かったのに、後半では地の文章が増え自由間接話法 (描出話法) が目立つようになる。これはオースティンの意図的なものと考えられるが、その目的は果たして何であろうか。

次に小説の内容から見てみると、エリザベスがダーシーから求愛されることを読者は薄々予測はしていながらも、実際その場面になるとどうしても唐突な感じが拭えない。また、エリザベスはキャサリン夫人 (Lady Catherine) から突然の訪問を受けるが、一体誰が彼らの秘密をキャサリン夫人に伝えたのであろうか。さらに、リディア (Lydia) が結婚出来たのはダーシーの計らいであることが何故かエリザベスにはしばらく知らされない。物語の進行上大切と思われるいくつかの情報が読者にも伝えられていない場合が多い。デイヴィッド・ロッジ (David Lodge) いわく、「オースティンは省略することが多く、批評家の議論を呼んでいる」のである。最近の研究では、ある批評家はこれを「職務怠慢」という言葉で、ある批評家は「評価の不透明性」という言葉で論じている。これらの概念が、オースティンが果敢に用いていた自由間接話法と何らかの関係があるのではないかというのがこの小論の趣旨である。

## 1. オースティンの語りの技法(1): 直接話法による人物描写

『自負と偏見』は「全知の語り」よりも、エリザベスの視点から語られる場合が多い。物語の前半では直接話法が多く、まるでテニスのラリーのように、登場人物たちは小気味よく会話の応酬をする。ともかく例を見てみよう。場面はビングリー (Bingley) の屋敷 'Netherfield' の居間である。姉ジェーン (Jane) を見舞ったエリザベスは夕食のあと、本を読み始める。ビングリー家の人々はカード遊びに興じている。彼らは「女性の教養」について話し始める。

① 'Your list of the common extent of accomplishments,' said Darcy, 'has too much truth. The word is applied to many a woman who deserves no otherwise than by netting a purse, or covering a screen. But I am very far from agreeing with you in your estimation of ladies in general. I cannot boast of knowing more than half a dozen, in the whole

range of my acquaintance, that are really accomplished.'

②'Nor I, I am sure,' said Miss Bingley.

③'Then,' observed Elizabeth, 'you must comprehend a great deal in your idea of an accomplished woman.'

④'Yes; I do comprehend a great deal in it.'

⑤'Oh! certainly, cried his faithful assistant, 'no one can be really esteemed accomplished, who does not greatly surpass what is usually met with. A woman must have a thorough knowledge of music, singing, drawing, dancing, and the modern languages, to deserve the word; and besides all this, she must possess a certain something in her air and manner of walking, the tone of her voice, her address and expressions, or the word will be but half deserved.'

⑥'All this she must possess, added Darcy, and to all this she must yet add something more substantial, in the improvement of her mind by extensive reading.'

⑦'I am no longer surprised at your knowing *only* six accomplished women. I rather wonder now at your knowing *any*.'

⑧'Are you so severe upon your own sex, as to doubt the possibility of all this?'

⑨'I never saw such a woman. I never saw such capacity, and taste, and application, and elegance, as you describe, united.'

Mrs. Hurst and Miss Bingley both cried out against the injustice of her implied doubt, and were both protesting that they knew many women who answered this description, when Mr. Hurst called them to order, with bitter complaints of their inattention to what was going forward. As all conversation was thereby at an end, Elizabeth soon afterwards left the room.

⑩'Elizabeth Bennet,' said Miss Bingley, when the door was closed on her, 'is one of those young ladies who seek to recommend themselves to the other sex, by undervaluing their own; and with many men, I dare say it succeeds. But, in my opinion, it is a paltry device, a very mean art.'

⑪'Undoubtedly,' replied Darcy, to whom this remark was chiefly addressed, 'there is meanness in all the arts which ladies sometimes condescend to employ for captivation. Whatever bears affinity to cunning is despicable.'

Miss Bingley was not so entirely satisfied with this reply as to continue the subject.<sup>1</sup>

(番号, 下線筆者)

①ではビングリーが言ったことに、ダーシーが「君の定義は広すぎる。僕が知っている限りでも、本当に教養ある女性なんて6人知っていればいいほうかな」と応じる。女性を見ればすぐに好きになるビングリー、女性を見ればすぐに短所を探し出すダーシーの性格がよく出ている。②はミス・ビングリー (Miss Bingley) のセリフで、ダーシーが知っている少ない「6人の女性」の中に入っていると考える自信過剰な女性である。③では、自分を公衆の面前で罵倒したダーシーに「女性の教養を本当にお分かりですね」とエリザベスが問い質している。④でダーシーは彼女の挑戦を受けて立つ形になる。「女性の教養」はこの小説にとっては大切なテーマの一つになっている。オーズティンはそれを登場人物たちに議論をさせることによって、読者に本当の教養について考えさせ

ている。彼女の作品が教育的（‘didactic’）と言われる所以であり、だから時代を超えて長く読み続けられるのであろう。さて、⑤の伝達節に‘cried his faithful assistant’とあるが、一体誰が言っているのでしょうか。オースティンはこの辺りから徐々に読者に「読みの姿勢」を要求し始める。ミス・ビングリーであることは大概の読者なら想像が付く。エリザベスとダーシーの真剣な会話に分け入る「不作法」は大目に見ても、「音楽、歌、絵画、踊り、加えて歩き方、声の調子、顔の表情にも優れたものがなければならないわね」と女性の教養を語って、いかにも自ら外見だけにこだわる中身のない人間であることを露呈してしまっている。ダーシーは、彼女を庇いながら⑥で、「それに加えて、女性のもっと本質的なもの、たくさんの本を読んで理性<sup>3</sup>を磨かなければならないだろうね」と彼の本音を語る。ビングリーの書齋が貧弱なものであるのに比べ、彼は自ら蔵書を増やし先祖代々の大きな書齋を充実させている。エリザベスも読書家である。二人とも本を読むことが理性を磨くためには一番重要であることを認めている。<sup>3</sup> そうすると⑦で「なるほど、あなたが教養ある女性を6人しか知らないのも頷けますわ。一人でも知っているのが不思議なくらいですから」と言うエリザベスの趣旨がよく理解できる。つまり、彼女は暗に夕食後の余暇を読書に当てないでカード・ゲームに興じているビングリー姉妹を指して言っているのである。⑧でダーシーはエリザベスが言ったことに驚きを隠せない。何故なら、彼の周りには他の女性はともかく自分は教養があると思い込んでいる女性たちが多いからである。⑨は明らかにエリザベスの謙虚さを物語っている。読書が好きで大切なことと思いつつも、読んでいる量は必ずしも多くないと彼女は理解している。こうした素直さはダーシーを驚かせるが、ビングリー姉妹には別な「性格」として映る。エリザベスが部屋から出て行ったあと、ミス・ビングリーは⑩のように、「自分たち女性のことを悪く言って、男性に取り入ろうとするの、卑怯な手口だわ」と彼女を非難する。この言葉が向けられたダーシーは、⑪で「確かに。ずるさに似るやり方は軽蔑に値しますね」と彼は言う。この後のミス・ビングリーの態度が引用の下線部である。中野好夫訳を見ると「が、ミス・ビングリーは、この答えだけではまだ不満だったと見え、そのままこの話は打ち切りにしてしまった」<sup>4</sup>とある。つまり、ミス・ビングリーはエリザベスの悪口をもっとダーシーが言わないので黙ってしまったという解釈である。果たしてそうであろうか。

デイヴィッド・ロッジは、‘diegesis’（全知の語り）と‘mimesis’（登場人物の視点からの語り）に触れて、以下のようにオースティンの直接話法について語っている。

Among the classic novelists, Jane Austen tends toward a dominantly mimetic method. Her stories are unfolded in a series of scenes, with a minimum of authorial description, and her skill in revealing character through speech is justly celebrated.<sup>5</sup>（下線筆者）

オースティンはロッジが説明しているように、セリフつまり直接話法によって人物描写を行う技術に長けていたのである。引用を再度見直しても最小限の地の文章しか用いず、彼女はミス・ビングリーの人間としての本質的なものに欠ける性格、ダーシーの気難しい割には人間的優しさもある性格描写を直接話法によって生き生きと描いている。さらに、わずか一ページほどの会話の中に、語られていない登場人物たちの心の駆け引きがびっしりと詰め込まれているのが理解できる。内容の濃さに感嘆してしまうと同時に、果たして一般読者はどの程度この言外の意味を読み込むことができるのか疑問に思う。オースティンは姉のカサンドラ（Cassandra）に書簡で次のように書いている。

There are a few Typical errors — & a “said he” or a “said she” would sometimes make the

Dialogue more immediately clear — but “I do not write for such dull Elves As have not a great deal of Ingenuity themselves.”<sup>6</sup>

オースティンは、“said he” とか “said she” という伝達節を付ければ会話が（誰が言っているのか）すぐ理解できるのだが、「私は想像力のない鈍感な読者のために書いているのではない」と言っている。さらに、彼女は『自負と偏見』の校正の際に、かなり削った（‘lopt & cropt’）ようである。つまり、「読みの姿勢」をかなり強く彼女は読者に要求していることになる。

さて、前述したダーシーの言葉を聞いてそれ以上話題を続けようとしなかったミス・ビングリーの態度について、他の解釈の可能性がないかどうかもう一度考えてみたい。クリス・ジョーンズ（Chris Jones）は言われていないことがオースティンの会話を形作っているとして、‘It is not simply that the reader has to follow who is speaking; she has to reconstruct, and unravel, the unspoken projections and identifications that structure the dialogue.’<sup>7</sup>と述べている。「読者は単にそのセリフを誰が言っているのか理解しなければいけないだけではない、そのセリフによって言われていないこと、そのセリフが実際誰に向けて言われているのかを解き明かし、再構築しなければいけない」のである。ミス・ビングリーはダーシーの言葉がエリザベスを指して言っているのではなく、自分に向けられている可能性があることに気付いたのではないだろうか。彼女はそれに気付かないほど愚かな女性ではない。後の場面でダーシーが手紙を書いているのを何かと邪魔する彼女の軽薄さを思い起こせば十分に考えられることである。このようにオースティンは最後に評価を下す段になって、ずっとその場からいなくなって評価を曖昧にする傾向がある。この場合、ダーシー（オースティン）がエリザベスを非難しているのか、ミス・ビングリーを非難しているのか曖昧なのである。

『自負と偏見』では多種多様な人間が登場する。人々の「奇異」を描くことでは、オースティンはフィールディングやゴールドスミスらのイギリス古典小説の伝統を受け継いでいると言える。たとえば、何も考えずにすぐに女性を好きになるビングリー、プライドが高く気難し屋のダーシー、人の欠点を見抜けない美人でお人好しのジェーン、観察力が鋭く才気溢れるエリザベス、娘たちを結婚させることだけが生き甲斐のベネット夫人（Mrs. Bennet）、書斎に籠って本ばかり読んでいる偏屈なベネット氏（Mr. Bennet）、学術的なメアリー（Mary）、軽薄なミス・ビングリー、そしておべっか使いのコリンズ（Collins）と、例を挙げていけば切りがない。小説の前半に直接話法が多いのは、筋を動かす前にまず登場人物を舞台セットに乗せて性格描写を行おうとするオースティンの意図があるからに他ならない。直接話法による人物描写の例をもう一つ挙げてみたい。コリンズは、オースティンの小説の中では最も下らない人間の一人に属する。ベネット氏が「どこでその繊細なお追従（‘flattering with delicacy’）を習ったのですか」と聞いても、彼はその皮肉を理解できない鈍感な男なのである。彼が機会がある度に褒めちぎるのは貴族のキャサリン夫人である。中身のない取るに足らない人間なので盲目的に上流階級の人に擦り寄るのは仕方がないとしても、退屈極まりない彼の人生哲学を聞かされるのは周囲の人々にとっては迷惑千万である。さて、エリザベスとガーディナー（Gardiner）家の人々がキャサリン夫人の屋敷に招かれたとき、コリンズは彼女たちに着ていく服についてこうアドバイスする。

‘I would advise you merely to put on whatever of your clothes is superior to the rest, there is no occasion for any thing more. Lady Catherine will not think the worse of you for being simply dressed. She likes to have the distinction of rank preserved.’<sup>8</sup>

「自分の服の中で一番良いものを着て行ってください。何もそれ以上着飾る必要なんてありませんよ。キャサリン夫人は質素な服を着ていても何とも思いませんから」とコリンズは言う。読者はキャサリン夫人が外見に囚われない気さくな女性であることを想像する。ところが、「彼女は身分の違いをはっきりさせたいのですから」というコリンズの言葉でこの場面は突然終わる。何もガーディナー夫人からもエリザベスからもコメントはない。ここでも、オースティンはその場からすっとなくなってキャサリン夫人やコリンズへの評価を最後に下していない。下さないことによって評価を曖昧にしているのである。

## 2. オースティンの語りの技法(2)：自由間接話法による心理描写

ちょうど小説の中間あたり、エリザベスがコリンズの家に滞在しているとき、彼女はダーシーから突然次のように愛の告白を受ける。

'In vain have I struggled. It will not do. My feelings will not be repressed. You must allow me to tell how ardently I admire and love you.'<sup>9</sup>

ある程度関心があるにしても、これほどダーシーが思いつめているとは読者は想像していなかった。いささか唐突な感じがするのは否めない。エリザベスにとってもまさに青天の霹靂である。ダーシーの心理がもう少し描かれていれば、このような奇異な感じはしなかったはずである。ともかくも、ダーシーの内面が描かれていないことは多くの批評家が今まで指摘してきたことであり、*Darcy's Story* という本（ダーシーの視点から『自負と偏見』を描き直したもの）が出版されるくらいである。ロバート・マイルズ（Robert Miles）はこのことを 'misprisions'（職務怠慢）という言葉を使って説明している。

Darcy and Elizabeth learn to understand each other better, and in this respect *Pride and Prejudice* is also the novel that best evinces Austen's generic interest in moral education. The learning curve, while undergone by both protagonists, is disclosed us solely through Elizabeth's point of view and here free indirect speech is essential. Whereas we only see the effects Darcy's learning produces (effects mediated and muddled through Elizabeth's limited consciousness), we live through Elizabeth's. Austen is a realist in these matters: her characters do not learn at once, but slowly, in fits and starts. Free indirect speech is once again an essential device, for it is through it that we remain caught, if not stuck, within Elizabeth's misprisions.<sup>10</sup>

マイルズは「ダーシーとエリザベスは互いに理解することを学ぶ...二人の学習曲線はエリザベスの視点を通してのみ明らかにされる。この点において自由間接話法は不可欠である」と述べている。学習曲線とはたとえばどんなものであろうか。先の引用でダーシーは、'You must allow me'（下線筆者）と求愛の場面でも命令口調になって「高慢」が目立つ。エリザベスの拒絶に会った後の手紙の中でも、'I demand your attention'（下線筆者）のように「高慢」が抜けきっていない。ところが、ペムバリー・ハウス（Pemberley House）で彼らが再開した時、ダーシーは彼女に、'Will you allow me'（下線筆者）という言葉を投げかけて学習が進んでいることが具体的に理解



できる。マイルズはさらに引用の最後で「ダーシーの学習効果はエリザベスの限られた意識によって仲介され、曖昧にされる...再びここでも自由間接話法は必要不可欠な技法となる。というのは、彼女の自由間接話法によって我々読者はエリザベスの職務怠慢に捕われて動けなくなるのだから」と述べている。「職務怠慢」とは何のことであろうか。語り手がオースティンの場合は「全知の語り」になって、必要な情報は全て読者に提供され、登場人物が知らされないことでも知っているのが普通である。しかし、視点がエリザベスに移って、彼女の自由間接話法で語られる場合、情報は全てエリザベスの所に集まって彼女が情報の操作を行うことになる。読者が知らされるべき情報を流さなかった場合、それが「職務怠慢」になるわけである。ところが、自由間接話法の縛り——視点が登場人物の内面に深く入り込んでしまっている——によって物語のプロット進行上大切な情報をエリザベスが知り得ない場合が起きてくる。つまり、自由間接話法が、目に見えないところで「職務怠慢」を引き起こしていることになるのである。

エリザベスはダーシーから求愛を受けた時、ビングリーとウィッカム（Wickham）の一件を引き合いに出して彼を激しく詰り、拒絶する。ダーシーは翌日長い手紙を書き、ビングリーが女性を見れば恋をすること、傍から見てジェーンにもその気がなさそうに見えたことから二人の中を割いたと説明する。ウィッカムに関しては、聖職に就くことが財産受領の条件だったのに、それを辞めて自堕落な生活に陥り、こともあろうに財産目当てにまだ成人に達していないダーシーの妹と駆け落ちの計画を立てていたことを打ち明ける。この誠実な手紙を読んだエリザベスは、初めて自分の「偏見」に気付くのである。

'How despicably have I acted!' she cried. — 'I, who have prided myself on my discernment! ...Pleased with the preference of one, and offended by the neglect of the other, on the very beginning of our acquaintance, I have courted prepossession and ignorance, and driven reason away, where either were concerned. Till this moment, I never knew myself.'<sup>11</sup>

「自分には分別があると思っていたわ。でも、こともあろうにウィッカムが好意を寄せてくれたから彼を好きになり、ダーシーが私を無視したからといって傷付くなんて、まるで無知に恋をし理性を投げ出してしまったようだよ」と彼女は悔いる。「今になって、はじめて自分というものに気付いたわ」と思う。エリザベスが、学習し変容していく瞬間である。この文章は直接話法による心理描写である。自由直接話法とも呼ばれ、劇で言えば独白に当たるものである。小説の後半は地の文章が多くなり自由間接話法が目立つようになる。この語りはそこへと移動する前の中間点と言える。主として前半では登場人物たちの言動が描かれていたのが、後半では静かにエリザベスの内面へと視点が移動するのである。

ダーシーの手紙を読んだ後、エリザベスとガーディナー夫妻はイングランド北部へ旅行に出かける。ペムバリー（Pemberley）を訪れたとき、近くにダーシーの屋敷があることを彼らは知る。エリザベスは最初行く決心がつかなかったが、主人は不在ということを聞いて、ダーシーが幼いころ育ったというペムバリー・ハウスを見ようと思った。この訪問が彼女の気持ちに重要な変化をもたらすのである。

Elizabeth, as they drove along, watched for the first appearance of Pemberley Woods with some perturbation; and when at length they turned in at the lodge, her spirits were

in a high flutter.

The park was very large, and contained great variety of ground. ①They entered it in one of its lowest points, and drove for some time through a beautiful wood, stretching over a wide extent.

Elizabeth's mind was too full for conversation, but she saw and admired every remarkable spot and point of view. They gradually ascended for half a mile, and then found themselves at the top of a considerable eminence, where the wood ceased, and the eye was instantly caught by Pemberley House, situated on the opposite side of a valley, into which the road with abruptness wound. ② It was a large, handsome, stone building, standing well on rising ground, and backed by a ridge of high woody hills; — and in front, a stream of some natural importance was swelled into greater, but without any artificial appearance. Its banks were neither formal, nor falsely adorned. Elizabeth was delighted. ③She had never seen a place for which nature had done more, or where natural beauty had been so little counteracted by an awkward taste. They were all of them warm in their admiration; and ④at that moment she felt, that to be mistress of Pemberley might be something!<sup>12</sup> (番号, 下線筆者)

自然描写が少ないオースティンにとっては珍しく約一ページの分量を割いてペムバリー・ハウスの美しさを発見するまでの行程を描いている。物語の前半でエリザベスは姉のジェーンを見舞いに Netherfield まで 3 マイル歩いている。この行程をオースティンは 5, 6 行の文章で片づけていたのに、どうして今回はその行程を丁寧に描いているのであろうか。①で「美しい森の中を彼らはしばらく進み、半マイルほどのだらだら坂があって、登りつめると高い丘の頂に出た。森はつきて急に視界が開け、正面の峡谷たたくむペムバリー・ハウスが目飛び込んできた」とある。②では「大きなハンサムなすくっと立った」という表現があり、③では「人工の手が加えられていない」とあって、荒削りなダーシーの印象を思い起こす。つまり、ペムバリー・ハウスはダーシー本人と考えられないだろうか。苦勞してその屋敷の美しさを発見したように、エリザベスは、これから時間をかけてダーシーの本当の姿を発見するのである。④が自由間接話法である。感嘆符(!)が付いているから容易にそれと理解できる。小説の後半のこの辺りから自由間接話法が目立って多くなり始める。

屋敷の中に案内されたエリザベスとガーディナー夫妻は、家政婦のレノルズ夫人 (Mrs. Reynolds) からダーシーの人柄について聞く。彼女は彼が 4 歳のころから面倒を見ていて、「旦那様はもうこれ以上の方はいないという、地主様でござ主人様でございます。旦那様のことをよく言わない小作人も召使たちも一人としてございませぬ」と言い、さらに彼女は続けて「私が人生をもう一度やり直してもこんな素晴らしいご主人様はいらっしゃらないでしょうし、思い上がっていると言う方もいらっしゃいますが、ただ近頃の若い方のようにべらべらおしゃべりにならないせいでございましょうか」と話す (p. 188)。これを聞いたエリザベスは、今まで自分が見てきたダーシーと別人のように違うのに驚く。二階のギャラリーに案内されたエリザベスはダーシーの肖像画と対峙する。彼女に微笑みかけるその絵を見たとき、「実際に会っているときにさえ感じなかった優しい親愛感を本人 ('the original') に抱く」(p. 189) のだった。彼らは、予定を早めてペムバリーにやって来たダーシーに帰り際偶然に出会う。ガーディナー夫人は初めて会ったダーシーの印象を「彼のことを高慢と呼ぶ人がいるそうだけど、私にはちっともそう見えなかった」と言う (p. 195)。

エリザベスはこのような客観的な材料、すなわちペムバリー・ハウス、レノルズ夫人の話、そしてガーディナー夫人の印象をもとにダーシーへの想いを変えていくのである。

エリザベスの想いが決定的となるのはガーディナー夫人の手紙を受け取ってからであろう。彼女はウィッカムがリディアと駆け落ちをしながらも、正式に結婚ができてスコットランドに赴任できたことが、しばらく腑に落ちなかった。頃合いを見てガーディナー夫人に問い合わせたところ、全てダーシーが裏で手を回して事を収めたということであった。最後に夫人は「あの人の頭のよさにも、考え方にも感心しました。強いて欠点と言えば、ちょっと暗いところかしら。でも、良い奥さまと結婚したら、奥さまがちゃんと教えてくださいますものね。彼は本当に恥ずかしがり屋ですね。だって、あなたの名前を一言も言わないのですもの。でも内気なのが今は流行なのかしら」(p. 247)と手紙を締めくくる。これを読んだエリザベスはダーシーが味わたに違いない辛酸に思いを馳せる。リディアは、はねっかえりの世間知らずの女の子であるがエリザベスの妹である。彼は顔を見るのさえも嫌なウィッカムに、頭を下げて金を渡ししながら彼女と結婚してくれるように頼んだのである。全てがエリザベスのためであった。‘Her heart did whisper, that he had done it for her.’ (p. 248) という自由間接話法で彼女の気持ちが表現されている。

小説の終わり近くになると、かなり自由間接話法が目立つようになる。場面は、ロンボーン(Longbourn)の家で開かれたパーティにダーシーとビングリーが訪れているところである。ペムバリー・ハウス以来久しぶりに彼女はダーシーと顔を合わすことになる。彼女の想いはもう決まっている。ところが、なかなか自分に話しかけてくれようとしないうダーシーの挙動に一喜一憂するエリザベスである。

She looked forward to their entrance, as the point on which all her chance of pleasure for the evening must depend.

①‘If he does not come to me, then,’ said she, ‘I shall give him up for ever.’ The gentlemen came; ②and she thought he looked as if he would have answered her hopes; but alas! the ladies had crowded round the table, where Miss Bennet was making tea, and Elizabeth pouring out the coffee, in so close a confederacy, that there was not a single vacancy near her, which would admit of a chair. And on the gentlemen’s approaching, one of the girls moved closer to her than ever, and said, in whisper,

‘The men shan’t come and part us, I am determined. We want none of them; do we?’

Darcy had walked away to another part of the room. She followed him with her eyes, envied every one to whom he spoke, had scarcely patience enough to help anybody to coffee; ③and then was enraged against herself for being so silly!<sup>13</sup> (番号、下線筆者)

あの理性的なエリザベスが恋をすると、豹変とまでは言わないが、まるで10代の女の子になったような変わりぶりである。しかし、それは自由間接話法で彼女の心に入り込んでいるからで、表面上は何ら普段と変わらない冷静なエリザベスの態度なのであろう。①で「私のところにすぐ来てくれないのなら、彼を永遠にあきらめるわ」と彼女は言う。これは、前に説明した自由直接話法である。②そして③が自由間接話法である。ダーシーがこっちにやって来そうな気配なので、エリザベスの望みもかなえられそうになったとき、彼女は「あー！」と心の中で叫ぶ。他の女性たちがテーブルを囲んでしまって彼が入る隙間をなくしてしまったからである。ダーシーは部屋の向こう側に行ってしまう、彼が話しかける女性全てにエリザベスは嫉妬してしまう。客にコーヒーを振舞う心



にも余裕がなくなってしまった彼女は取り乱した自分自身に「ばかね！」と叫ぶのである。自由間接話法は、直接話法や間接話法のようにはっきりそれと見分けがつかない。伝達動詞を伴わないので、地の文章とはっきり区別がつかないが、感嘆符（！）が付いていれば地の文章の中でも自由間接話法であることがはっきりと区別できる。

さて、この章では段階を踏んで自由直接話法から自由間接話法の例を見てきたわけだが、やはり物語の後半、エリザベスがダーシーから求愛されてから地の文章が多くなり自由間接話法が目立つようになってきている。これは取りも直さず語り手オースティンの意図的なものであり、目的はエリザベスの「偏見」の変容を彼女の心の中に入って描写するためであった。この変容の描写にオースティンはかなりの時間をかけていることになる。ダーシーの手紙から始まって、ペムバリー・ハウスの訪問、ガーディナー夫人の手紙、そして最後にキャサリン夫人の突然の来訪となるわけだが、エリザベスのダーシーへの想いが段階を追って確実なものへと変わっていくのがよく理解できる。彼の手紙によって、自分の偏見に気付き、彼の屋敷を訪問することによって彼への愛が生まれ、ガーディナー夫人の手紙によってそれが決定的なものになり、最後はキャサリン夫人との対決によってその愛に責任を持とうと固く決意するのである。オースティンはこのように『自負と偏見』において語りの技法を、果敢にそして巧妙に使い分けていることに我々は気付く。

### 3. 描かれなかったダーシーの心理とキャサリン夫人への密告者

エリザベスの心理がかなり詳しく描写されているのに比べて、ダーシーの心理がほとんど描かれていないというのが数多くの批評家が今まで指摘していることである。ところが、小説の最初をよく読めば、ダーシーのエリザベスへ寄せる気持がごくわずかながらヒントのようにちりばめられているのが分かる。たとえば、「彼女の眼の色は魅力的だ」とか (p. 19), 「彼女に注意を払うことは危険だ」と彼は感じているのである (p. 44)。さらに、いち早くエリザベスがダーシーに興味を抱き始めていることを直感したのはシャーロットであった (p. 17)。つまり、小説の最初で二人は愛し合う運命にあることをオースティンは暗示していたのかも知れない。しかし、それはごく些細な、彼女にしてみれば精一杯の読者に要求する「読みの姿勢」だったのかも知れない。このような些細な暗示はウィッカムあるいはコリンズの登場によって、跡形もなくかき消されてしまう。ウィッカムから財産譲渡の経緯を聞いて、ダーシーへの憎しみを募らせた矢先の彼女への愛の告白である。エリザベスにしても、読者にしてかなり唐突な感じがする。「違和感」があると言えば、言い過ぎかもしれないが、それに似た読後感である。もう少しダーシーの心理が描かれていれば、そのような感じはしなかったはずである。どうしてダーシーの心理が描かれなかったのであろうか。描こうと思っても描けなかったのであろうか。あるいは、意図的に描かなかったのであろうか。この疑問を解くのはかなり難しい。

同じように、エリザベスとダーシーの秘密を誰がキャサリン夫人に密告したのかも疑問である。ダーシーの求愛と同じように、突如としてキャサリン夫人がロンボーンを訪れて、高飛車な態度で身分の違う結婚は止めなさいとエリザベスに迫る。エリザベスも負けてはいない。同じジェントリー出身なので身分の違いはないと反論し、結婚の事は肯定も否定もせず、結局キャサリン夫人を怒らせて帰してしまう。この後、冷静になったエリザベスは一体誰が彼らの秘密をキャサリン夫人に伝えたのか考える。彼らの秘密は彼ら以外に誰も知らないはずである。つまるところ、姉ジェーンの婚約が決まったのでエリザベスとダーシーが会う機会が多くなるので、二人の結婚を予測する人が噂を立てたのではないかとエリザベスは推測する。彼女は、キャサリン夫人、コリンズそしてメリ

トン（Meryton）と出所を逆に辿って、噂の主はあのゴシップ好きなルucas夫人ではないかと結論付ける。実際、この事件の後ベネット氏はコリンズから不可解な手紙を受け取る。エリザベスの「この地で最も有名な人物の一人」との結婚を祝う内容であった。ベネット氏はこの人物がダーシーではないかと思うが、女性を見れば欠点を探し出す彼の性格を思い出して、「馬鹿げた話」として取り合わなかった。コリンズはその噂を妻シャーロットの実家があるメリトンから仕入れたことを暗に述べ、キャサリン夫人に伝えたことも明らかにする。しかし、キャスリーン・グランシー（Kathleen Glancy）は次のような矛盾点、「謎」を指摘する。

How could there be a report in Meryton about anyone, much less one of Mrs Bennet's daughters, getting married, which has not reached the ears of Mrs Bennet herself? ...Her sister Mrs Philips can't have heard it either, for she would have passed it onto Mrs Bennet at once. It is all the more amazing because it is known to Sir William and Lady Lucas.<sup>14</sup>

あのゴシップ好きのルucas夫人が噂の主とすれば、メリトンから一マイルと離れていないロンボーンのベネット夫人に必ず流れていたはずで、そうなれば娘エリザベスの結婚相手としてのダーシーへの彼女の態度も一変していたはずである。彼女の妹のフィリップス夫人も噂を聞いていないわけではない、ところがベネット夫人には伝わっていないのである。つまり、噂自体が本当に存在したかどうか疑問が出てくる。

ジョン・サザランド（John Sutherland）は、オースティンがプロットの組み立てにおいて誤りを犯した可能性は除外して、コリンズが嘘を付いたのではないかという仮定に立って誰がキャサリン夫人に密告したか「謎」解きを行った。容疑者は、シャーロット・コリンズ（旧姓ルucas）である。彼女は、年齢が27歳で、それ程器量良しではない。チャンスがあれば、「結婚するためだったら、女性はもっと積極的にならなくては」と考えている。ビングリーがロンボーンでの舞踏会で最初に踊ったのがシャーロットであったが、彼は二番目に踊ったジェーンを好きになる。何かとベネット家の間では嘲笑的になっている。エリザベスがコリンズを袖にした数時間後、彼との結婚を決めた彼女はエリザベスから「信じられないわ!」という非難の言葉を投げ掛けられる。つまり、シャーロットはエリザベスに少なからず嫉妬と悪意を抱いている可能性がある。

Charlotte is off-stage for the second half of the novel — disposed of in the great marriage auction. But simply because she is not seen, we should not imagine that she is getting less clever or less sharp. Having to dine every evening with the Revd Mr William Collins and the Rt. Hon. Lady Catherine de Bourgh would turn a saint's milk of human kindness to vinegar. What we may assume is that an embittered Charlotte is determined to settle accounts with Elizabeth. She will poison Elizabeth's prospects, with a pre-emptive strike that she knows will provoke an outburst of the young woman's incorrigible 'prejudice'. It is a stroke of well-conceived malice. It fails — but only just.<sup>15</sup>

シャーロットはどういうわけか物語の後半から姿を消す。姿が見えなくなっても、彼女の抜け目のなさや鋭さは衰えていないはずである。毎晩あのコリンズやキャサリン夫人と夕食をともししていれば「温かい人情も悪意に変わる」ものである。シャーロットはキャサリン夫人に密告することに

よって先制攻撃を企て、エリザベスへの長年の恨みを晴らそうとしたと考えられるのである。

ジョスリン・ハリス (Jocelyn Harris) はこのような謎が生まれる 10 年ほど前に、『自負と偏見』がサミュエル・リチャードソンの『グランディソン』をかなり参考にしていることを指摘している。彼女によれば、オースティンは「木片遊び」(‘spillikins’) を行っているのである。つまり、オースティンは『グランディソン』の出来事や登場人物の性格をバラバラにして一旦放り投げ、その形を崩さないように一つ一つの木片を取り上げて彼女自身の物語を作っていることになる。シャーロット・グランディソン (Charlotte Grandison) の「いたずらっぽいところとか茶目っ気があるところ」(‘playfulness and archness’) はエリザベスが受け取り、打算的なところはシャーロット・コリンズに受け継がれている。

That book [Sir Charles Grandison] was full of fine but ultimately local insights. Jane Austen's triumph was to make everything connect. She threw his 'precious particles', as [Henry] James called them, into the kaleidoscope of her mind, and created there the sparkling, shifting scenes that make up her book, *Pride and Prejudice*.<sup>16</sup>

‘make everything connect’ とあるように、オースティンは人一倍プロットを重要視する作家である。「木片遊び」においても一つ一つの木片を拾い上げるときには、他の木片を動かさないように、因果関係の信憑性には細心の注意を払ったに違いない。彼女が間違いを犯すとは考えられないのである。それとも、彼女の手紙にある ‘a few Typical errors’ の一つなのであろうか。

#### 4. 評価の不透明性 (‘Evaluative Opacity’)

『自負と偏見』に限らず、オースティンの作品は現在に至るまでいろいろな批評がなされてきた。「箱庭のような世界」、「風俗小説」あるいは「無害な娯楽」といった言葉で象徴されるように、伝統的には政治的に中立として扱われてきていた。ところが 1970 年代になると、中産階級を描いていることや、反ロマンティシズムあるいはフェミニズムの傾向が見られることから、ある種のイデオロギーを持った作品として、あるいはオースティンを政治的作家と位置付ける批評が現れた。1980 年代になるとコンピュータを駆使して彼女の作品を言語学的に研究しようとする試みが見られるようになる。たとえば、キャサリン夫人は ‘we’ という代名詞をほとんど使わないという興味ある結果が出ている。最近の研究の動向は、「語りの技法」(narratology) に着目した研究書が目立つ。「視点」(point of view) とか「自由間接話法」(free indirect speech) などの用語が頻繁に使われている。特に新しいのは、「評価」(evaluation) という用語が使われ始めていることである。

「評価」という言葉は教育機関では、学生に対する「評価」という言葉で一般的であるが、文学作品にこの用語を初めて用いたのはウィリアム・ラボフ (William Labov) であった。彼は、「評価とは物語において道徳的な、宗教的な、あるいは教育的な視点を持つことである」と言っている。分かりやすく言えば、その物語が語られる価値があることを語り手自ら示すことである。さらにラボフは「異なる視点を持つか、あるいは視点を全然持たないかによって、同じ内容の物語でも何通りもの語られ方がある。視点のない物語は「だから何？」という気のない読者の反応に会う。上手な語り手はたえずこのような質問を<sup>かわ</sup>躲していくのである」と続ける (Labov 1972: 366)。「視点」(a point of view) というのは、この場合、我々が普段使っている「一人称、三人称の語り」、あるいは

は「話法」と意味が少し異なる。簡単に言えば、語り手が登場人物に下す評価の判断基準のことである。たとえば「理性」あるいは「分別」を重要視するオースティンは、ベネット夫人を、‘*Her [Mrs. Bennet] mind was less difficult to develop. She was a woman of mean understanding, little information, and uncertain temper.*’ (p.3) と評価している。ところが、これは登場人物が舞台セットに初めて現れるときにオースティンが常套的に下す評価で、実際プロットが動き始めると評価の「視点」が不確定 (indeterminacy) になることが多くの批評家に指摘されているところである。

ごく最近の研究ではジオフ・トムプソン (Geoff Thompson) とスーザン・ハンストン (Susan Hunston) が、ラボフの論を発展させて、評価の判断基準を明確に4つに分けている。①善と悪 (good-bad), ②確実性 (certainty), ③予知 (expectedness), ④重要性 (importance), である (Thompson and Hunston 2000: 25)。①は語り手が登場人物を評価する基準, ②③④は出来事を評価する基準である。②と③は一緒にしてもよい。マシミアノ・モリニ (Massimiliano Morini) はその著書の中で、多くの読者が経験する難しさ、つまり「オースティンは結局何を言いたいのか」を考えたときの捉えどころのなさを、彼女の「評価の不透明性」という言葉で表現している。

Owing to narratorial ignorance or reticence, Jane Austen's novels are permeated with evaluative opacity, on the good-bad, certainty, and importance axes. We have already seen how on certain occasions, her narrators refuse to provide open evaluations of certain characters. The same is true of events: sometimes an omniscient narrator informs his/her readers about facts which have taken place on a different temporal plane; on other occasions, though, an ignorant or reticent narrator omits crucial information — or does not signal the importance of certain details. ...In *P & P* [*Pride and Prejudice*], we are never told who betrays Elizabeth Bennet and Darcy's secret to Lady Catherine.<sup>17</sup> (下線筆者)

オースティンの小説には「評価の不透明性」が浸透しているとモリニは述べ、その原因を語り手の ‘ignorance’ あるいは ‘reticence’ に求めている。この小論でも、ミス・ビングリーとコリンズの具体例を上げた。モリニはさらに、出来事においても評価の不透明性が見られることを指摘している。下線部にあるように、「時として全知の語り手は違う場所で起こっている事実を情報として読者に伝えるが、無知で無口な語り手は決定的な情報を伝えるのを忘れてしまうか、あるいは些細な事であってもその重要性を知らせない」と述べ、その具体例としてキャサリン夫人への密告者が誰であるか明らかにされていないことを上げている。つまり、語り手がそのことに出来事の評価基準④重要性を認めていないことになる。語り手とはこの場合、オースティンであろうか、エリザベスであろうか。ここで重要なのは、モリニが評価の不透明性が起こるのは、オースティンが語り手の場合ではなく、「無知で無口な語り手」、つまりエリザベスが語り手の場合のみと指摘したことである。モリニはこのあと自由間接話法を用いて彼の論を発展させていないが、この小論の第2章で取り上げたマイルズの「職務怠慢」と主張する内容は同じである。前述したように、自由間接話法は登場人物の心理を描くのに適しているが、違う場所で起きている重要な出来事を情報として伝えるにはどうしても無理がある。オースティンが忘れて伝えなかったというよりも、むしろエリザベスの自由間接話法を隠れ蓑にして、意図的に情報を伝えなかった可能性もかなりある。モリニはこのこ

とに関して次のように述べている。

...crucial information is withheld for the sake of the 'interest principle': readers may expect, but are not explicitly prepared for, Darcy's proposal to Elizabeth; they do not know at first that Darcy has a part in marrying Wickham and Lydia; and there remains an unsolved mystery as to how Lady Catherine comes to know that her nephew is in matrimonial danger. ...A great deal of 'interest' (or, suspense) is created by using the 'central intelligence' (James 1953: 299-300) of Elizabeth a mimetic reflector at crucial moments, ...<sup>18</sup>

'interest principle' というのは引用にもあるように「サスペンス」であって、読者の「次に何が起きるのか」という興味を意図的に高めるものである。この場合、エリザベスが 'central intelligence' であるから、情報の管理は彼女が行うわけである。つまり、彼女が書いていなければ、知らなかったことになる。ダーシーの心理にしても、キャサリン夫人の密告者にしても、ウィッカムとリディアの結婚にしても彼女は「知らなかった」のである。情報操作を、もし仮にしているとすれば、それはオースティンである。繰り返しになるが、自由間接話法の短所はある一人の登場人物の心理に集中するあまり、外界の出来事に注意が行き届かないことである。オースティンがこの話法の短所を逆手にとって、「職務怠慢」あるいは「評価の不透明性」を作り上げているとすれば、それは類稀なる巧妙な語りの技法と言う他はない。これが、この小論の結論である。

デイヴィッド・ロッジはオースティンのプロットには 'peripeteia'、つまり読者を驚かす事件が多いと指摘している。<sup>19</sup> ダーシーの求愛、キャサリン夫人の訪問、リディアの結婚などがそうであった。これは前述した 'interest principle' と結びつく。ロッジは続けて、オースティンの語りが 'chronological order'、つまり時が後に戻ることはなく、時の流れに沿っていることも指摘し、後に戻って説明する場合は手紙の形を取っていると述べている。確かに、エリザベスに指摘されたビングリーやウィッカムの事を、後でダーシーは手紙に書いている。キャサリン夫人の訪問も後でコリンズが手紙でベネット氏に知らせている。リディアとウィッカムの結婚の事も後でガーディナー夫人が手紙でエリザベスに知らせている。興味ある指摘である。さらに、ロッジは読者と語り手が「同じ飛行機に乗って、知っている過去から知らない未来へと、因果関係に従って旅するようだ」と述べている。まさに、的を得た比喻である。飛行機の中に一緒にいるから、外界の情報がエリザベスにも読者にも伝わらないのである。「評価の不透明性」は、まさに自由間接話法によって意図的に引き起こされていると言える。

## おわりに

『自負と偏見』は読み直すたびに新しい発見がある。とくに会話のやり取りには含みがあって、オースティンの意図はどこにあるのか改めて考えさせられることが多い。ところどころ矛盾する点、もっと説明を要したほうが良いと思われる点が多々ある。荒削りと言ったほうが的確かも知れない。しかし、そういった矛盾点が何故なのか考えた場合、サザランドが指摘したように今まで考えも付かなかった説明が付いてしまうから驚きである。それだけ奥深い作品であるからだろう。いろいろな読み方が出来るから、読者の「読みの姿勢」のブレをある程度許容させてくれる作品だったからこそ、今でも多くの人に読み継がれているのだと思う。



#### 注

1. *Pride and Prejudice*, pp. 28-29.
2. この当時, 'mind' という語は現代の「心」という意味よりも, ドクター・ジョンソンやゴールドスミスが用いていた「理性」という意味に近い。
3. 惣谷氏もその著作の中で, エリザベスとダーシーは同じ部類の人間に入ると主張し, 登場人物たちは彼ら自身の言葉を持つことによって性格描写が生き生きとなされていると指摘している。『ジェイン・オースティン研究』 pp. 162-165。
4. 『自負と偏見』, p. 63.
5. *After Bakhtin*, p. 120.
6. *Jane Austen's Letters*, p. 202.
7. 'Nothing that did not Answer'.
8. *Pride and Prejudice*, p. 124.
9. *Ibid.*, p. 145.
10. *Jane Austen*, pp. 83-84.
11. *Pride and Prejudice*, p. 159.
12. *Ibid.*, p. 185.
13. *Ibid.*, pp. 259-260.
14. *The Literary Detective*, p. 491.
15. *Ibid.*, pp. 493-494.
16. *Jane Austen's Art of Memory*, pp. 128-129.
17. *Jane Austen's Narrative Techniques*, p. 28.
18. *Ibid.*, p. 46.
19. *After Bakhtin*, p. 118.

#### 参考文献

1. Aylmer, Janet. *Darcy's Story*. Harper, 2006.
2. Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Oxford University Press, 2004.
3. Harris, Jocelyn. *Jane Austen's Art of Memory*. Cambridge University Press, 1989.
4. Jones, Chris. 'Nothing that did not Answer': Jane Austen and Romantic Interrogation, paper delivered at Sustaining Romanticism. Seventh International BARS Conference, Liverpool, July 2001.
5. Labov, William. *Language in the Inner City*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1972.
6. Le Faye, Deirdre, ed. *Jane Austen's Letters*. Oxford University Press, 1995.
7. Lodge, David. *After Bakhtin — Essays on Fiction and Criticism*. Routledge, 1990.
8. Miller, D. A. *Jane Austen, or The Secret of Style*. Princeton University Press, 2003.
9. Miles, Robert. *Jane Austen*. Northcote Publisher, 2003.
10. Morini, Massimiliano. *Jane Austen's Narrative Techniques — A Stylistic and Pragmatic Analysis*. Ashgate, 2009.
11. Sutherland, John. *The Literary Detective — 100 Puzzles in Classic Fiction*. Oxford University Press, 1999.
12. Thompson, G., and S. Hunston. 'Evaluation: An Introduction', in S. Hunston and G. Thompson, eds, *Evaluation in Text*. Oxford University Press, 2000.
13. 北脇徳子「ジェイン・オースティンの読書観」『京都精華大学紀要』第35号, 2009年。
14. 島崎はつよ『ジェイン・オースティンの語りの技法を読み解く』開文社, 2008年。
15. 惣谷美智子『ジェイン・オースティン研究 — オースティンと言語の共謀者 —』旺社, 1993年。
16. 中野好夫訳『自負と偏見』新潮社文庫, 2006年。
17. 前田彰一『物語のナラトロジー』彩流社, 2004年。